

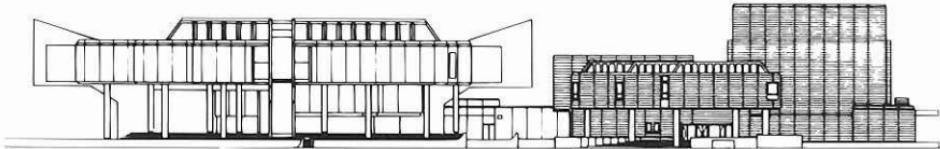
12代今泉今右衛門 色鍋鳥更紗文八角大皿 昭和38年頃

# 佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

31 August 1995

No. 110



## エッセイ

## 昭和をみる—九州の伝統工芸

## はじめに

九州は古くから工芸が盛んであり、唐津焼、有田焼をはじめとする陶芸や博多織、久留米絣といった染織、さらに漆工、木竹工、金工など多種多様な工芸が独自の風土と歴史のなかで醸成され、継承されてきた。しかし、近代以降、九州の工芸は必ずしもその活動が活発であったとはいえない。

このような状況のもと、昭和2年には帝展に美術工芸部が新設され、昭和25年の文化財保護法の施行、昭和29年、同法改正とともに重要無形文化財の指定と保持者の認定制度、また同年にはじまつた日本伝統工芸展の開催という動きは、九州の工芸界にとって大きな活力となり、希望となつた。昭和41年に日本工芸会西部支部が発足し、西部工芸展が開催され、今日の九州の工芸を支える大きな柱の一つになつていった。

## 昭和のあゆみ

近代社会のなかで工芸は、「工芸とは?」という自己への問い合わせを余儀なくされ、それがさまざまな形で工芸制作に影響を及ぼしたというのが、近代以降の工芸の流れではなかつたか。

明治30年代以降の工芸のあり方に対する反省、また機械制工業が実体をもちはじめたなかで、工芸家に芽ばえた作家精神は、大正期をへて、昭和初期に一斉に顕在化していく。

高村豊周らによって結成された无型は、「個性」を自己の表現の第一に置き、その個性表現のよりどころとして、アール・デコや構成主義などの美術・工芸様式を実用品に取り入れ、作品を制作した。昭和2年第八回帝展において美術工芸部が新設され、守旧的な工芸大家が審査員の大半を占めたにもかかわらず、无型などの新しい創作作品が多い認められ、このような流れは、もやは時代の趨勢ともいえた。また国画創作協会は昭和2年に工芸部を設置し、翌3年から公募を開始し、また、旧无型同人を中心とした実在工芸美術会が昭和10年に結成され、個性を尊重しつつ、生活を基

調にした作品の制作を求めていった。

一方、農展（農商務省圖案及應用作品展覽会、大正2年～、のちに商工展と改称）は産業工芸の発展のために設けられたものであつたが、文展、帝展からはずれた工芸家の出品展となり、本来の成果を見ることができなかつたが、その意味で昭和2年の帝展工芸部新設、また昭和3年の商工省工芸指導所開設は産業工芸をより実体をもつものにしていった。

このような中で、九州の工芸家、九州出身の工芸家では、高野松山は帝展を中心に活躍し、伝統の中に新風をふきこみつつあつたし、増村益城は日本漆工展に出品すると共に、實在工芸展にも入選している。陶磁では中国、日本の古陶の技法解説に基づく製作が本格化はじめ、唐津焼の中里無庵（12代太郎右衛門）が成果をあげつあつた。また大分の生野祥雲齋（竹工）は、昭和18年第6回新文展で特選をうけている。

昭和20年代には、戦時下の苦しい時代をくぐりぬけ、新たな創作への始動をはじめた。昭和21年には日本美術展（日展）がはじまり、また昭和22年に宇野三吾を主宰とした四耕会が、同23年には八木一夫、山田光、鈴木治などの走泥社が結成された。特に走泥社の同人は現代美術への強い関心を背景に、陶芸を陶芸たらしめている構成部分を一つひとつ解体することからはじめ、昭和40年ごろに「オブジェ焼」と呼ばれる独自の表現を確立した。

20年代の最も大きな動きは、伝統工芸の再評価と日本伝統工芸展の開始である。昭和25年に制定された文化財保護法により、無形文化財が選定されることになり、27年に工芸技術に関する無形文化財の選定が行われた。28年には後世に伝えるべき工芸技術の調査、後継者育成を目的に日本工人社が結成され、また29年には「第1回無形文化財日本伝統工芸展」が開催された。同年5月には文化財保護法が改正され、新しい基準による重要無形文化財の認定の制度が生まれ、翌30年2月に第

一次、5月に第二次の認定が行われた。8月には日本工人社が発展的解消して日本工芸会が発足し、文化財保護委員会との共催によって10月に第2回日本伝統工芸展が開催された。

九州の工芸家にとってこれらの動きは大きな励みになり、活力となり、第2回展では酒井田柿右衛門（12代）が日本工芸会賞を受賞しているが、九州の工芸家のなかにはこの展覧会がどのようなものか見定めようとする部分が無いわけではなかった。しかし、公募制がはじまる35年第7回展の頃から、増村益城や鈴田照次（染織）、奥川忠右衛門（陶芸）らが受賞し、だいに伝統工芸展に目が向けられるようになつていった。九州という伝統的な傾向の強い土地柄、自立した作家が育ちにくいという九州の地域的な特質のなかで、日本伝統工芸展はさほど抵抗なく入つていけた。

昭和41年、日本工芸会西部支部が発足し、同年9月に第1回西部工芸展が開催された。日本工芸会西部支部は初代幹事長に就任した鈴田照次に負うところが大きく、「西日本の工芸がその伝統や種類の豊富さにかかわらず、他の地方の入選者に比して低い」ことは問題であるとし、それが「工芸感覚の欠如に由来する」ことを指摘し、常に会員を激励した。そして高鶴元（陶芸）が昭和44・45年と二年連続して日本伝統工芸展で受賞し、つづいて江口勝美（陶芸）、屋宜元六（染織）、樋渡陶

六（陶芸）らも受賞し、また徐々にではあるが入選者の数も増えていった。

九州の工芸は、これまでに陶芸では12代、13代今泉今右衛門、13代、14代酒井田柿右衛門、中里無庵、金城次郎、井上萬二、染織では小川善三郎、松枝玉記、古賀フミ、漆工では高野松山、増村益城、それに金工の米光太平、竹工の生野祥雲斎、人形の鹿児島寿蔵が重要無形文化財に認定され、これは他の地域と比べても決して劣るものではない。しかし、陶芸では佐賀を中心とした北部九州に集中しており、また竹工は大分というように地域による偏りが大きいという点も以前から指摘されている。このような問題をどう解決するのか、新しい世代をどう育てていくのか、九州の工芸のもつ共通性と独自性を日本全体の工芸のあり方のなかでどう考えるか。真に日本固有の文化に根ざした造型を獲得できるか、その岐路に立っていると言えよう。

（学芸員 宇治 章）



鈴田 照次 木版縮更紗着物「松葉文」



生野祥雲斎 もろこし編盛籠



児島与一 博多人形「放生会翁舞」

## 常設特別展案内

## 《八幡宮愚童記》について

〈「戦争と美術」より〉

会期：7月14日～8月27日

本県塙田町久間に所在する八幡宮に「八幡宮愚童記」の外題を持ち、上下2冊からなる冊子本が所蔵されている（以下、便宜的に「久間八幡宮」、「久間八幡宮本」と呼ぶ）。

久間八幡宮については『肥前古跡縁起』(1665)に「熊野と云所に八幡の宮有り平氏三位中将維盛卿の廟也」とある。また社伝では建久元年(1190)鶴岡八幡宮の分靈を勧請したとされ、祭神は応神天皇と平維盛である。

久間八幡宮本は2冊ともに縦17.1cm、横25.6cmの大きさで、各表紙と裏表紙は紺紙に金泥で草花、遠山、雲霞等が描かれ、表紙中央上部に朱色の紙に「八幡宮愚童記上」、同じく「下」と墨書きされた題簽が貼られている。袋綴じで上下それぞれ19丁、16丁を数える。詞書と図で構成され、図は上に5図、下に4図の計9図で、詞書の半丁分に貼付けられている。

久間八幡宮本は応神天皇を八幡神とし、その由来と靈験などの説話を伝える八幡縁起の一作例である。八幡縁起は、各地の八幡宮を中心に所蔵される中世の絵巻によって定形化をみるが、宮次男氏によって甲乙二系統に分類される（宮次男「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」）。一方、八幡縁起の主要な舞台である九州では、社頭図と対をなす掛幅形式の八幡縁起がみられ、本県でも北茂安町の千栗八幡宮に所蔵されている。

久間八幡宮本は、上では応神天皇の母神功皇后の三韓出兵の説話を中心に、下では応神天皇の出産から八幡神として宇佐八幡宮に祭られるまでを内容としており、詞書は絵巻形式の八幡縁起のうち乙系統とほぼ一致している。久間八幡宮本の詞書は仮名主体で、句点と漢字には振假名が付けられ読みための配慮が窺える。

次に、図の内容は下記の通りである。

- (1)仲哀天皇、塵輪という八頭の鬼を弓で射殺す。
- (2)神功皇后の出兵の途中、大牛が船に突進。
- (3)海中に住む磯良、舞に呼び寄せられて危に乗つてあらわれる。

(4)船を連ねて出陣。

(5)敵を破る。

(6)鶴羽葺の家で神功皇后、応神天皇を出産。

(7)応神天皇が石櫛現となつて宇佐に垂迹、のち金鷹となつてあらわれる。

(8)足を切られた和氣清麻呂が猪に乗つて宇佐八幡に参詣。

(9)五色の蛇が清麻呂の足をなめ、足が甦生する。

(1)(3)(8)(9)の場面は乙系統の図様であるが、(2)は甲系統に属す。

久間八幡宮本は絵巻形式に比べて図の数が少なく、三韓出兵前後の住吉明神が岩を射抜く場面、神功皇后が岩に碑文を書く場面などは省略されている。また、(1)では塵輪の頭が射落とされ、(2)では住吉明神が大牛を海中へ投げ返すため船の舳先に立つ通例の図様は採られていない。さらに三韓出兵のクライマックスの(5)では、早珠満珠の二珠は描き込まれず、一方(6)では「槐木を逆さまにたてて」との詞書に忠実な出産の場面が描かれている点でも異なっている。

久間八幡宮本は乙系統主体に甲系統の図様を含み、また両系統にはない図様の改変がみられる。描法は引目鉤鼻による大和絵的手法で細部まで丁寧であり、彩色は比較的良質な顔料が用いられ金色も多用されているが、個性が乏しく穏やかな描法で終始している。

久間八幡宮本は中世の八幡縁起との相違は多い。八幡信仰そのものからは遊離し、読み物としての要素が強く近世的な特色を示していると思われ、制作時期は江戸時代前期を想定したい。また横本、紺紙に金泥で草花等を描いた表紙、書名を記した題簽の形式など、久間八幡宮本の体裁は奈良絵本と呼ばれる一群の絵入写本の特徴を示している。奈良絵本では横本より大形縦本の方が上層階級向けとされるが、久間八幡宮本は粗製ではなく、むしろ豪華本とみるべきである。

奈良絵本の題材は、御伽草子が主流とされ、八幡縁起の作例を知らないが、塵輪の頭が落ちる凄

惨な場面は避けられ、皇后神功の出産の場面は具体的に描かれる点などは女性向けの配慮と考えられ、奈良絵本の特色のひとつである嫁入り本的性格を示唆するものと解せないだろうか。

久間八幡宮本を納める杉箱の蓋表に「八幡宮縁起二冊并跋一巻／田原良真」、蓋裏に「日輪山明学坊琳」の墨書がある。跋一巻については附属せず田原良真的名も不明である。明学坊については寛文6年(1666)銘の久間八幡宮鳥居に「宮司明学坊」とあり、久間八幡宮本は宮司坊であった明学坊に所蔵されていたらしい。また「久間村郷土志」(1930)によれば維盛社(趾)の文政6年(1823)銘の石碑に「明学坊琳仙」とあり、箱書きは江戸時代後期19世紀前期のものと思われる。

また蓋裏には二種類の貼紙があり、比較的新しい方に「八幡宮御縁起式冊壱箱／高源院様御譲之由ニ而從／直澄公御寄附相成居申候」とある。高源院は岡部内膳正長盛の娘で、長盛の内室は徳川家康の弟松平因幡守康元の娘であったため、高源院は家康の養女として育てられた。慶長8年(1605)に初代佐賀藩主鍋島勝茂の後室として縁組がなされ、2年後の慶長10年に婚礼を挙げている。

鍋島直澄(1615-69)は高源院が生んだ勝茂の三男で、寛永16年(1639)佐賀藩の支藩蓮池藩の初代藩主となつた。蓮池藩は散在する多くの領地からなり、久間八幡宮を含む塙田地方に最もまとまつた領地があった。直澄は寛文5年(1665)隠居後は塙田に住んでおり、前述の寛文6年銘の久間八幡宮鳥居は直澄が寄進したものである。

以上、直澄の久間八幡宮との関係は強く、貼り紙銘の信憑性についても十分考えられることである。また高源院の旧蔵であったとすれば、さらに奈良絵本の嫁入り本的性格から高源院が嫁入りした慶長期に制作時期を置けるかもしれない。



(1)



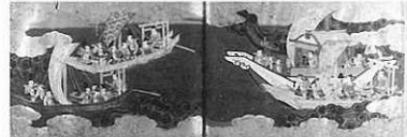
上表紙



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)

(学芸員 福井尚寿)

## 調査ノート 出土琴に見る和琴成立への可能性

弥生時代から奈良時代にかけての遺跡から発掘される「古代琴」を和琴の原初的形態としてとらえ、その変遷を追う中で最も注目すべきことの一つに共鳴槽の変化がある。それは現在のところ滋賀県彦根市松原内湖遺跡から発掘された弥生時代中期例を最古として、正倉院に伝来する奈良時代の和琴成立までの約800年間に見られることで、以後現在までそのスタイルは変化していない。

共鳴槽の構造には、大きく別けて2つある。一つは琴板の下方に断面凹型の槽部を取り付ける構造(槽造りの琴)。そして一つは、琴板から槽の磯板を一本で作り出し断面凹型の構造のものへ槽底の一枚板を取り付ける構造(甲造りの琴)である。いずれも弥生時代には成立していた形式であることは既に発掘資料から確認されている。前者は発掘例も多く、先に述べた約800年という長い期間に槽部の全長・幅を長くしていくことで容積を拡大していくという変化が確認できるものの、後者は現在までに3例しか確認されておらず、時代による構造の変化は定かでない。しかし、後者は現在雅楽などで用いられる和琴へ直接つながる形式として重要であり、以下紹介する福岡県朝倉郡夜須町惣利遺跡出土の木製琴(写真1)と滋賀県草津市中沢遺跡出土の木製琴(写真2)はその意味で貴重である。

惣利遺跡例は古墳時代中・後期(6世紀中頃)の地層から発掘された木製の琴で、現存長118.5cm、最大幅(尾幅)46.0cm、尾端に3突起を残し、琴板



写真1 惣利遺跡出土の木製琴

の両端には槽の磯板と思われるものがはつきりと確認できる(写真3)。頭部を欠損しており全形は窺えないものの、これまで各地で発掘確認された諸琴の形状から判断すると全長150cm程度の長大な琴であったことが推測できる。なお尾端の突起は現状から判断すると実際は6突起あったものと思われる。中でも本例の最も重要な所見は琴板(甲)から槽の磯板を一本により6cm程度の高さで作り出している点にある(写真4)。ただここで注意することは、槽底の一枚板を共伴していないこと。それに磯板には裏板を固定するためのほぞないしほぞ穴等の加工がないことであって、はたして本例が完全なる凹型(断面)の共鳴槽を持った琴であったかどうかはにわかに判断しがたい。栃木県佐野市羽田出土の古墳時代後期の彈琴埴輪などに表現された琴(写真5)についても同じであって、あるいは脚板とも理解できる形状を示している。しかし、磯板と琴板の厚みがいずれもほぼ同じ(1.8cm程度)であって、しかも両者の接する部分がほぼ直角に整えられていることからすれば、こ



写真2 中沢遺跡出土の木製琴



写真6 内側から



写真3

れを脚板とは考えにくい。

一方、中沢遺跡例は弥生時代後期（3世紀中頃）の地層から発掘された木製の琴で、現存長35.7cm、最大幅（尾幅）11.7cm、尾端に2突起を残し、琴板の一端には槽の磯板と思われるものがはつきりと確認できる。尾部の一部を残すのみで全形は窓えないものの、尾部に6本の突起を持つと仮定すれば、全長150cm程度の長大な琴であったことが推測できる。本例の最も重要な所見は惣利遺跡例と同様、琴板（甲）から槽の磯板を一本で、しかもほぼ直角に4.5cm程度の高さで作り出している点にある（写真2・6）、さらに磯板の尾部寄りに裏板を取り付けたと見られる樹皮の結縛痕が残ることや、尾部の2突起の付け根に通弦孔と思われる小孔が施されていること（写真2・6）は惣利遺跡例には見られない重要なポイントであり、正倉院に伝来する奈良時代の和琴との類似性が認められる。

この他、雛形ではあるが「甲造りの琴」として既に福岡県沖ノ島5号祭祀遺跡出土の金銅製雛形五弦琴（白鳳時代・写真7）が知られていて、つまり



写真5 弹琴埴輪(部分) 八王子市郷土資料館所蔵



写真4 内側から

以上の3例が現在までに確認できた「甲造りの琴」と言うことになる。

今回新たに滋賀県草津市中沢遺跡出土の木製琴や福岡県朝倉郡夜須町惣利遺跡出土の木製琴が確認できたことで初めて、「甲造りの琴」も他形式の琴同様、弥生時代から奈良時代までが一つの線で結ばれることとなった。そして、それぞれに変遷のスタイルがある中で、「板造りの琴」「棒状の琴」あるいは「槽造りの琴」はしだいに消滅し、「甲造りの琴」だけが和琴へと連なつていった可能性が強い。

（学芸員 山崎和文）

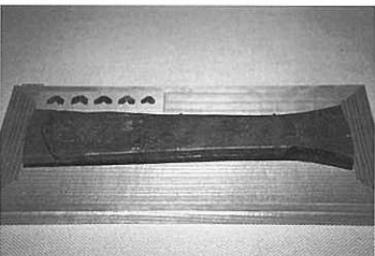


写真7 金銅製雛形五弦琴 宗像大社文化財管理事務局所蔵

\*本稿を執筆するにあたり放送大学の笠原潔氏、草津市教育委員会の小宮猛幸氏には多くの資料を御提供いただきました。また、夜須町教育委員会の石井扶美子氏には惣利遺跡の出土琴について御教示いただきました。深くお礼申し上げます。

#### 参考文献

- ・木野正好「琴の誕生とその展開」『考古学雑誌第66巻第1号』日本考古学会 1980年
- ・『滋賀県草津市中沢遺跡出土の和琴について』滋賀県教育委員会 1986年
- ・宮崎まゆみ「埴輪に表現された楽器についての調査概要」『武藏野音楽大学研究紀要第21号』武藏野音楽大学 1989年
- ・笠原潔「歴史学の研究（1）」『放送大学研究年報第12号』放送大学 1994年
- ・『時代をかなでた楽器 音の結ぶ世界』編集団 佐賀県立博物館 1994年

## 行事案内

7月⇒9月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

カレンダー内、□印は休館日

常	設	展	美	術	館	展	覧	会
観覧料大人200(150) 大学生150(100)※高校生以下は無料、( )内20名以上団体								

博	物	館	美	術	館	4	号	展
1号展	2号展	3号展 大展	1号AB展	2号展	3号展	4号展		
自然史 ふるさと性徳の 誕生日記念	老古・歴史 長崎蟹島の書	後藤九十年 副島種臣の書	民具 良具・いまむか しほか	7/2	7/2	第78回 佐賀美術協会展 6/22(木)~7/2(日)佐賀美術協会		
7/14 昆虫の世界 (2)	7/14 草木・歴史 佐賀の近代化	7/14 戦争と 争と美術	7/14 佐賀の 「氣を盛る」人①	7/7 鍋島船通 もめんの壁	7/7 日本近代洋画の 裸体像	第8回 九州国展会佐賀支部写真展 7/11(火)~7/16(日) 九州国展会佐賀支部 第37回 佐賀大学生美術部美術工科組合展、毎日学生美術部展 7/25(火)~7/30(日) 佐賀県立美術館		
8/27	8/27	8/27	8/27	8/27	8/27	昭和をみる -九州の伝統工芸と第30回記念西部工芸展-	8/5(土)~8/27(日) 佐賀県立美術館	大人610(510) 大学生300(200) 高校生以下は無料 ※( )は団体料金

第45回 佐賀県美術展 9/9(土)~9/17(日) 佐賀県教育文化課  
大人200(150) 大学生100(70) 高校生以下は無料 ※( )は団体料金

要45回佐賀県児童生徒制作作品展  
9/2(火)~9/26(火) 佐賀県教育文化課

佐賀県立博物館開館25周年記念展  
知られるるるさとの自然史  
大集合！佐賀平野と有明海の生きものたち  
9/29(金)~11/5(日) 大人610(510) 大学生300(200)  
高校生以下は無料 ※( )は団体料金

## 日誌

## 平成7年度 佐賀県博物館協会総会

日時：平成7年5月22日(月)14:00～17:00

場所：はがくれ荘（2階 フラワーホール）



佐賀県立博物館・美術館報 第110号

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840 佐賀市城内1-15-23 TEL0952-24-3947 FAX0952-25-7006

印刷 日之出印刷株式会社

平成7年8月31日